座談会「GIGA スクール時代の学校図書館の蔵書構築を考える」

司会進行：鎌田 和宏氏（本事業委員・帝京大学教育学部教授）
登壇者：長谷川 優子氏（本事業委員・元埼玉県立久喜図書館
副館長・東京学芸大学非常勤講師）
今井 福司氏（本事業委員・白百合女子大学准教授）
片岡 則夫氏（清教学園中・高等学校　探究科教諭）

鎌田：「GIGA スクール時代の学校図書館の蔵書構築を考える」をテーマに座談会をいただきました。みなさんオンラインで参加ですのでよろしくお願いします。長谷川さん、今井さんに話していただいて、それを受けて片岡先生にお話いただき、その後やり取りをしていきたいと思います。

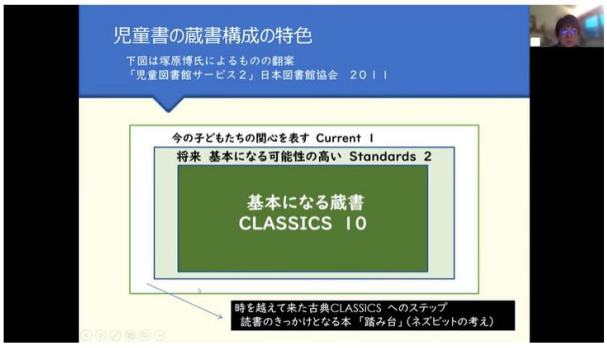
長谷川：（書籍の購入単価のうち）入門解説書は変わらない印象ですが、実感として、一般向けの教養書と言われるジャンルの値段が高くなっている感じがしています。一方で、知りたいと思っている大人はたくさんいるが、促成栽培のような教養の求め方をしています。そういう大人を見て子どもはどう思っているでしょうか？読書が特殊な技能になってしまっていくのではないかと感じています。

にもかかわらず、「探究的な学習」の求めるものは、児童生徒に対しても、学習活動を支える、作っていく教職員に対しても求めているものが大きく重い。ここで、ようやく図書館というものの、ステージが回って来たと思ってきたのですが、かえってもしかすると、もともと図書館が持っている「人を自由にするという部分」が、児童生徒にとっては、読むことの大変さも含めて不自由な感じを与えてしまっているのではないかと感じています。

高知県の梼原町の図書館は大変人気のある図書館です。建築の魅力は今回は触れずにおきますが、ここの特色は徹底して編集されている図書館だということです。編集された棚が訴えてきます。今、こういう図書館が一方で大変求められています。

蔵書構成は、編集作業だと思います。これまで蔵書管理というのは、収集・整理・保存の 3 つに分けられて、目の前にあるものを管理するということでした。今、実体のあるものと、明らかに実体のない（オンラインによる）デジタルとを共用的に使っていく資源供用型のものと、いわゆる相互貸借利用も含めて、図書館の利用者に向けて、どんなふうに見せて、どんなふうにアクセスを補償するか、「編集」ということが、蔵書構成だと思います。それには人の存在が大変大きく、学校図書館情報専門職がいるからこそできる「編集。」そして、この編集の根幹は、レファレンスだと思っています。

片岡先生は、徹底して生徒の意向調査をされていました。カウンターにいる司書が、レファレンスで何を受けていくかということで、そのポリシーとして、児童生徒一人一人とゴールを共有する伴走者になるということが、学校司書の立ち位置であり、レファレンスを受けるポリシーです。そのためには、知っておかなければならないことがあります。探究のプロセスを知っていて、目の前の人が、どういう段階にいるかということがわかっていてゴールを共有する。そして探究というのは、一人だけでは完成しないし、様々な人々と共有していくので、是非、レファレンスを記録に残す。それを共有することで学校の中でも交流が生まれる。交流することで、校内で蔵書構成を学校司書一人でやるのではなく、多くの人と共に行う。そして、レファレンスを受ける人の存在が強調されていき、学校図書館が何をしているかが外へ見えていく。この図（※右 2 枚画像）は子どもの本の蔵書構成を考える上での基本となる考えを示した図です。子どもの本を考える上で、基本になる蔵書が重要だということは言われ続けてきています。一方で正しいが、今、どちらかというと外側にある current（今の子どもたちの関心を表す current 1 ）をいかに作っていくことが対象のレベルによって違うのですが、基本になる部分で、読めるということ、親しむということをいかに作っていくことが重要です。ただ同時に学校図書館の作り手にとっては、外側へ外側へ current を広げる。基本蔵書の部分は、今まで持っている所蔵資料、基本蔵書の部分で、附属小金井小学校の例でも附属学校の実績で見ても、これまで本だけだったものをデジタルをもつなぎ手の人によって見える化されることによって、活かされていきます。デジタルで複本が授業のなかで生かしていくことができるということは見せてもらっていますが、図書館の外にあるものを意識させていくことが必要です。この比率は、相手によって違ってくるが、探究経験によってもこの比率が変わっていくはずです。中央の部分が小さくなっていって、外の部分が広がっていく。ただそれには、問いを言語化できるか、キーワードの切り出しができるかといったことで大きく違ってくる。それを判断しながら作っていく。



令和4年度文科省事業報告会「みんなで使おう！学校図書館vol. 14」アーカイブ

令和4年度文科省事業報告会「みんなで使おう！学校図書館vol. 14」アーカイブ

DB の「Yomokka！」の写真絵本を使った事例を紹介。（竹早小の例）このなかで、司書の感想のなかに十分に複本として用意できたから、「たくさんの写真絵本を本当に読み込んで、味わいつくす姿を見て、本も著者も、こんなにうれしいことはないだろうと感じた」読

む限界のある紙ではできなかったことをいわれています。こういう資料を入れていき、積極的に読む本を紹介していく。授業者とともに考えていく。こういう姿がたくさん見られていく。学校図書館の周りには、様々な世界があるわけで、これらとつなげていくことは、学校司書のすべきことです。学芸大附属では、GAKUMOPAC もあって、シンプルな画面で、附属学校、大学図書館、そして地域の図書館の蔵書も一緒にひけるサービスを作っていて、タブレットから生徒が外へ出ていける環境整備をしています。

最後に強調したいところとして、今、一方に情報リテラシー、情報活用能力に対して学校図書館が、一旦舞台から消えていったのではないかという指摘があります。さらに見直していくと、生涯学習の出発点として、課題解決をしていくという公共図書館としても大きなテーマ。図書館が読書センターとしての機能のみだと認知されているのは、実は公共図書館も同じなのです。今、学校が変わっていく、学校教育が変わっていく、学校図書館が変わっていくときに公共図書館も一緒になって切り開いていきたい、その主体は学校図書館だと思っています。学校図書館で使えるように外側の「モノ」がだんだん整備されてきています。学校図書館の担当者は、この外にあるモノも意識して編集していってほしいと思っています。

最後に『図書館雑誌』2022 年 12 月号特集「情報活用能力」学校教育と図書館の未来をつなぐ。これを普段は、学校図書館の担当者に読んでいただきたいと思うのですが、今回は、公共図書館、大学図書館など他の館種の皆さんに読んで欲しいと思って編集しました。今、一緒になって学校図書館の担当者と情報活用能力がキーワードで大きく政策への影響も考えられるものだから。実際に学校図書館の方が使える外側のモノについても紹介されています。

これは、私が関わったウィキペディアタウンで大宮で行ったもので、その時の結果ですが、生徒がこの文を編集する、生徒が自分の言葉で記事を書くこと。そのことが、この一行を書くことでどんなに考え、手間をかけて書いているかを経験する。その際に著作権のことも考えますし、原資料に光を当てることを自分たちの手で作ること。知の当事者になれることを公共図書館の人も学校図書館の人もともに喜び合う場となった。知を作る場、こういったことが生きていくのではないでしょうか。

鎌田：長谷川さん、ありがとうございました。いいお話なのでもっと聞いていたいです。すみませんが、今井さんにもお願いしましたので、次は長谷川さんのお話の所で紹介された『図書館雑誌』にも出てまいりました、今井さんにお話をお伺いしたいと思います。

今井：よろしくお願いいたします。本日ご参加いただいた方のコメントをざっと拝見しました。やはりコレクションについて悩んでいるところは、例えば 9 分類や 4 分類など特定の分類への偏りがあるとか、あるいは図書を使わなくなっている、学校図書館の目指す方向が共有できていない、適切な資料について選ぶことが難しい、とかそういった課題が挙げられ

ていました。

私の話題提供としては二点挙げていきたいと思います。学校図書館が扱うのは情報資源か情報資料かということと、ニーズを掴むためにはというところです。一つ目は既に他の場所でもお話したことがあるのですが、2013 年以降、司書過程で目録や分類を扱う授業というのは、「情報資料～」ではなく、「情報資源」という言葉が使われるようになっています。この「資料」と「資源」の違いというのは意外と広くは知られていません。ここでわざと「情報資源」という言葉を使っているのは、物理体のメディアだけではなく、ネットワーク上の情報資源も図書館で扱うメディアだということを宣言するために、「情報資料」という言葉から「情報資源」という言葉に切り替わっているわけでございます。

ただ、このことを考えますと、学校司書さんの大半の方は司書資格を取得していて、当然こういう授業も聞いていることはあると思うんですが、ただ学校図書館がここまで扱ってきたのは専ら物理体、特に図書に限るところが大きいかと思います。ネットワーク上の情報資源というのは、これまでは学校図書館で扱わない、あるいは扱えないということが行われていたことが多いでしょうし、あるいは学校図書館でわからなかったらウェブで探すということをして、図書館としては積極的なサポートをしないということをしていたかと思います。私がちょっと心配しているのはこのインターネット上、ネットワーク上の情報資源についてブラックボックス化しているところがあるのではないかということです。これは秘密になっているわけではありませんが、学校図書館業界としては何をするかわからない対象として、私たちの扱わないものとして見てきたことがあるのではないかと考えています。

GIGA スクール構想以後は、特にタブレットを活用している授業の中で、今日のお話の中にも出てきていたのですが、学校図書館が使うか使わないかに限らず、もう各授業の中でネットワーク情報資源が入り込んできているわけです。その時にネットワーク情報資源がこのままブラックボックスのような形で、見えないものとして扱い続けられるのかどうかというのは心配をしています。学校図書館としてはこの情報資源の選定評価も必要になってくるのではないかと思います。

情報資源と違ってネットワーク上の情報資源については、次のような性質があります。例えば図書館に物理的に所蔵されていませんし、例えばサブスク型の情報資源というのは、契約し続けられる限りはいつまでもアクセスできますが、契約が切れたところでもう過去のものについてもアクセスできなくなる恐れは常にあります。データベース関係では大丈夫だと思いますが、例えばネット上の記事ですと、良いと思った時点から後日内容が変更される、訂正されるということがあります。これがウィキペディアのように変更の履歴がちゃんと残っていればどう変更されたか追っていけるのですが、例えば一般的な新聞の記事を転載しているようなニュースサイトですと、知らない間に変わっていたということがあり得ます。こういう悪い点もありますが、ただ今日も出てきたところだと思いますけど、ライセンスの問題が生じなければ、同じ資料に複数人が同時アクセスできるといういい点もあるというわけでございます。

学校図書館の対処としては古典的な方法としてリンク集を学校のウエブサイトに載せてという方法がありますが、今更リンク集をつくっておくだけでよいのかとも考えています。次に情報資源の優先順位についてですが、例えば公共図書館におけるパスファインダーのような検索語を決める、百科事典、本、新聞、最後にウエブサイトにあたるという流れを今後も踏襲していいのかどうかは考えておく必要があるでしょう。あるいは、学校図書館で更新しているウエブサイトがアクセスできなくなっている等の定期的な評価をどのように行うかが問題となってくるとも思われます。
司書の苦手な分野の資料評価をどうするのかも問題になってくるでしょう。図書の場合は以前のように評判のいい出版社だからと評価しなくてよかったものが、ウエブサイトにおいては信用できるかどうかは内容を見てみなければできません。正しい基準を決める時に、判断を教員に委ねた場合、教員がわからない際に専門家へと持っていくべきなのかどうかなど、ブラックボックスとしないために今後考えなければなりません。

ニーズを掴むために学校図書館を利用していない人間に聞いてもアイデアは出ません。一つは片岡先生のように人気のあるものを拾っていくという形が考えられます。学校教育が何をしようとしているか、どこまでできるのか、どこまで働きかけができるのかは学校ごとに大きく異なるので、これらのことを把握するのは難しいです。特定の分野に偏っているのはその時点でのニーズに答えようとした結果ではありますが、軌道修正は本来図らなければなりません。だだし、文学に偏っていたのはそれしかできないような可能性もあるので、情報収集の難しさ、提案ルートの欠乏など解決すべき点は多々あると思われます。

以上のことからわかるように、GIGA スクール構想にかかわらずコレクションに関してやるべきことは変わっていません。ただし、学校図書館以外に多様な情報資源に触れる機会が高くなった際に、学校図書館に資料があるから行ってごらんなさいという指導が、インターネット上で調べなさいということになる点には個人的には問題関心があります。

鎌田：片岡先生、お二人のお話を踏まえてよろしくおねがいします。チャットでの質問がきています。「図書館の蔵書を生徒の関心に寄せていくと、生徒の関心の多様性が損なわれる面あるのではないかと思われます、現場での実感としていかがですか」との質問です。

片岡：質問ありがとうございます。「図書館の蔵書を生徒の関心に寄せていくと多様性が損なわれる」というご指摘について、実際に損なわれているのかは実は僕にはよくわかりません。確かに本があることによってその分野に興味を持って学んでいく可能性はたくさんあります。今目の前にある本の分野に興味がわいてくるというのは当然あることだと思っています。一方で例えば、本校にはディズニーランドのレポートが書架に 20 冊ほどあります。ディズニーランドを新たにテーマにする生徒には、「先輩のレポートをちゃんと読め」と言います。それだけの数の本やレポートがあるということは、その数だけのディズニーランドを見る「視点」があるんです。生徒にはそれらの本や作品とは別の視点で「もう一冊本を作

るんだよ」という言い方をしています。ですから確かにキーワードでいえば多様性は増えないのですが、切り口は豊かになっているという感じがしています。例えばディズニーランドの「やりがい搾取」を取り扱うようなテーマの生徒も現れます。このように、問題の切り口から蔵書の多様性が増していくという、面はありそうです。

長谷川先生が「知の当事者になる」とおっしゃっていて、その通りだと思いました。言い方を変えますと、作品を作って本人が「著作者になる」のが大事です。自分が著作権を持った作品を世の中に問い、不特定多数の人が見る。清教学園の場合は図書館の蔵書になるということですけれど。そうなったときに、自分の作った知的な財産が誰かに使ってもらえる喜びが味わえます。つまり、自分が実際に著作権を持つ、大事なものを世の中に差し出すという行為が大事です。学校図書館で作品や論文を作ったりする意義はそこあると思います。先生が「こういうことに答えなさい」という質問をして、言葉は悪いですけどニュース解説みたいなレポートを作るよりは、拙いかもしれないけれど、自分の関心で「こういうものを作ってみました、みんな見てね」、という学びがあったほうが楽しいと思っています。知りたいことを探して、読んで、まとめて、みんなに差し出すという原始的な形が必要です。

それからさきほどのインターネット上の話です。確かにインターネットは味方にするととてつもなく強い味方になります。使ってもいるのですけれど、一方で日本の出版は非常によくできていて、子どもたちがある事柄を知りたいと思った時に、そこそこ本を買えればそれで充分なだけの情報量はあります。出版の世界は豊かなんです。インターネット情報で「どこかで見たぞ」と思ったら、なんのことはない、手元の本の情報を写しただけだったということもしばしば起こるのです。つまり信用のおける情報というのはやはり、本の状態で出版されたものがかなりのところにあると思っています。GIGA スクールなんだからコンピュータを使えといえばその通りです。でも、僕は、今までの流れをひっくり返すかもしれないですが、コンピュータは情報受信機ではなく「発信機」として使った方が良いと思っています。つまり日本語入力ソフト等で世界に向けて発信するために使ったほうがいい。情報収集に関しては、まずは本を頼りにするべきだと。もちろん本も古くなりますし、お金をかけなければなりません。とはいえ、本を 10 冊積み上げてみればわかります。それと同じだけの信頼できて、再現性のあるリンク切れのない情報をネットから集めようと思った大変です。図書館と丸ごと読める紙の本の実力は、使ってみないとわからないと常々思っております。加えて、ネットには出典の書き方の問題があります。小学生がアルファベットの URL を書くのか、発信者や発信日はわかるのか。それだけに、まずは図書館の本を引用して出典を書くところから作品を作れたらいいと思っています。

鎌田：今のお話しを聞かれた、長谷川さんと今井さんがどんなことを思われたか、一言ずつお話していただきたいと思います。今の話の中で「日本の出版物は良くできている」という話は私もその通りだと思っていて、学校に情報端末が入って、そこに繋がっているインターネットのサイトを見れば、授業ができると思っている人は、一体日本の教科書とか本が、ど

ういうふうにできているか知らないんじゃないのかな、と思います。だから、出版物とかのでき方とか、情報の信頼性をどんなふうにして担保しているのか、ということがわかれば、恐ろしくてネット上の情報なんて簡単には使えないような気がするという話を、最近しています。

先に今井さんから、今の片岡さんのコメントにまた、何か思うところがあれば返してもらって、その後長谷川さんにお願いします。

今井：僕は片岡さんの仰っている、印刷の世界、出版の世界が豊かであるという話はその通りだと思っていますし、「学校図書館」と名乗っている以上、「図書」を否定して次へ進む、というのは、多分ないとは思っているのです。ただ、僕がすごく心配しているのは、最近、本屋さんがかなり潰れていて、本というのがこれだけのものがあるというのが、イメージとして大人も持ちにくくなっているのじゃないか、というのをすごく心配しています。例えば、大きな本屋さんに行って、全然自分の知らない分野の本棚へ行くと「こんなに知らない本が世の中にあるんだ」と一瞬絶望しかけるんですけど、ただ、すごく嬉しくもなるわけです。要するに、知らなかったことが、これだけあるっていうのが、その瞬間わかるからです。図書館の本のありがたさって、そこだと思うんです。「ここの棚は、僕は知らない」というのがわかる。でも、「知らない」けど「これだけのものがある」ことがわかる。ただ、ネットは最近リコメンドのシステムがどんどんしていくがゆえに、自分の知っていることは、とにかく関連情報に全部出てくるけれど、ちょっと脇道にそれたら、存在しないかのような扱いをとられてしまうことがある。僕が心配しているのは、大人の世代が持っている「本の世界って豊かだよ」という話を、使っていない世代、使っていない大人、使っていない子供が、どれだけイメージできるのか。それこそ、鎌田先生の背景に、本棚が沢山出ていますけれども、この本棚のイメージを、どれだけ色んな人に持たせられるか、学校図書館がどれだけできるか、というのがここ 30 年くらいの分岐点になるかな、と個人的には思っています。

鎌田：これ（※画像：鎌田先生の背景の本棚）は、長谷川さんの話に出てきた、「雲の上の図書館」の書棚です。長谷川さん、ではお願いします。

令和4年度文科省事業報告会「みんなで使おう！学校図書館vol. 14」アーカイブ

長谷川：はい。「編集された」図書館です。海洋堂のジオラマですよね。逆に、NDC ではない。私はどちらかと言えば、やはり日本十進分類法の自由さが好きです。知の体系が、巨人たちがきちんと成立しているという状態が好きなんです。ただ、学校図書館の場合は確かにクローズな図書館な

ので、相手を見ながら編集していくのだと思います。ただ、私も出版文化がどうなるかというのがすごく心配です。あえて言わせていただきますけれども、電子書籍のシステムは、例えば学術雑誌などは、シリアルズ・クライシス（学術雑誌の高騰化危機）の問題により専門図書館ですら購入が難しくなっています。大学図書館も同様ですが、学内の学術コミュニケーションが必要とするので、いわゆる有名雑誌は(紙媒体で)今後も買わざるを得ない事情もありますが、もしかするとまだ出版社さんとしては、児童出版系の電子書籍のシステムは一緒に歩んでいく余地がまだまだあるのではないかと思います。一方で公共図書館が電子書籍を導入するけれど使われない、ということが起きているのも事実です。それは特に子どものものを入れてくれていても、やはり忘れているのは、それをつなぐ人の存在です。今回の発表は明らかにつなぐ人、つなぐ場があるからよく使われていく、というのがわかります。繰り返しになりますが、子どものための電子書籍のシステムというのは、ぜひ現場の学校図書館と共に、それこそ公共図書館を含め図書館界の未来を作っていく場所なので、一緒にできたらと思っています。以上です。

鎌田：どうもありがとうございます。片岡さんのお話の冒頭にもあったと思うのですが、片岡さんの実践で紹介された『「なんでも学べる学校図書館」をつくる：ブックカタログ＆データ集』(片岡則夫、少年写真新聞社)。この本をぼくはいいなと思っています。この本は 2 冊出ていますが、まずはこの本を読んで生徒のニーズを把握するところから蔵書構成とか情報資源を考えないといけないと思っていて、確かに思いつきもしないようなものと出会えるということも大切だけど、もっと知りたいとか、考えたいと思ったことに応えてくれない図書館だったら誰も行かないのではないか、と思うのです。だから今のお話の中で、すごくいいなと思ったのは、蔵書構成、資源構成かもしれないけど、それは「編集」なんだということです。蔵書というのは学校図書館コレクション―本は重要―という話をしながら、構築方略をどうするかというところで、子どもと先生の顔が見えるコレクションじゃなかったら、その学校の図書館ではないだろうな、と思いました。長谷川先生もそうですし、今井先生のお話もそうですし、片岡先生のお話もすごく刺激的でしたが、図書館がその学校のことをちゃんと向いていないと、やはり学習センターとか読書センターとしては使われなくなってしまう。それが GIGA スクール時代の学校図書館の一番大きな課題なのではないかと思いながらお話を聞いていました。

鎌田：本当はまだまだ今井さんや長谷川さんにももっと話してもらいたかったし、対面でやっていると聴衆の感じを見ながら「あと 5 分くらい大丈夫ですよね」みたいなことを言いますけど、ネットだとできませんので。これにて GIGA スクール時代の学校図書館の蔵書構築を考える座談会を終了させていただきます。登壇者の 3 人の皆さん、どうもありがとうございました。